

「終末思想から見た韓日社会の過去・ 現在・未来の課題」に対するコメント

Response Comments on Kohara's Paper

橋本 滋男

Shigeo Hashimoto

小原先生には午後の講演を担当していただき、ありがとうございました。また、通訳をしてくださったイ・サンキョンさん、ご苦労様でした。韓国と日本の教会が歩んできた歴史は大きく異なり、それぞれの教会が現在、直面している課題や社会的な位置も異なりますが、しかし、ただ今の講演では、現代社会の全体的な流れの中で、韓国と日本の神学者が共通して考えなければならない問題について、幅広い視点から取り上げられました。わたしはこれを聞いて、21世紀になった両方の国の神学が果たすべき役割について、新しく考える世代が現れたという印象をもちました。これはわたしたちが国家という枠組みをこえて、前向きに進むための励ましになる講演であったと思います。

さて、講演のキーワードは「終末論」ないし「終末思想」でありました。講演の「過去：終末思想の歴史的意義」において、終末論が韓国の基督教の歴史に及ぼした影響について論じられましたが、わたしはそこから多くのことを学ぶことができました。そして納得できる点がいくつかありました。他方、日本の基督教史においては、終末論はあまり見るべき影響を与えなかったという指摘がありました。内村鑑三の例があげられましたが、それ以外に、日本の教会のなかでは取り立てて論じるべき事例がないようです。わたしはこの指摘について賛成であります。同時に、なぜそうなのかを問題にすべきだろうと思います。つまりなぜ終末論は日本の基督教にとって魅力的でなかったか、という問題です。その原因は、第一に、おそらく日本の文化や宗教的心情と関係があるのではないかと、思います。終末論は強い個人意識を生むという指摘があり、またそれに基づいて責任感を生むという特色が指摘されました。日本人は基督教に接し、これを受け入れる際に、終末論がそのような力をもつことについて、あえてこれを深く受け止めないという用心深さが無意

識的に作用したのではないかと考えられるのです。わたしたちは自分の国の文化や精神性について、いくつかの弱点を指摘することができます。それはたとえば個人の責任感の薄弱さであります。客観的で公平なルールを守るとか、それに反する時には裁きを受けるとか、そのような規範がうまく機能しない事態を見るのであります。日本でもうだいぶ前に流行った言葉ですが、「赤信号、みんなで渡ればこわくない」というのがありました。まさにそのような心情です。いわゆる「世間体の道徳」であります。第二は、日本人の一般的な宗教的価値観として、彼岸よりもこの世での繁栄や幸福を第一に求めるという姿勢が関係しているように思います。そこには神道のエートスが作用していると思われます。つまり日本のキリスト教において終末論はほとんど根付いていない、と思います。ところで、新約聖書が成立した時代の前後で、終末論が人々の思想や行動に強い影響を及ぼした状況を考えると、それは現実に対する強い絶望感があったことに気づきます。前2世紀にはユダヤ教徒はマカバイ戦争を戦い、後1世紀にはキリスト教はローマ帝国の迫害を経験しました。このような苦しい状況では終末期待が現実的な救いとなります。しかし日本の歴史では、そのような深刻な苦境ではあまりなかったのではないかと、ということです。したがってたとえばオウム真理教が終末思想を用いてその信徒らを動かしたとしても、それは終末論そのものもつ力によるというより、現代の世界がエコロジカルに破滅に近づいているという、誰もが感じている危機感をうまく利用したと言うべきではないでしょうか。

次に、小原先生は「 . 世俗化した終末論」という分析を提供されました。それは非常に興味深い主張でした。しかしわたしはちょっと疑問も感じました。たしかに強度の学歴社会の中で、競争原理が支配的である状況で、「人は人にとって狼である」というような人間関係を余儀なくされている状況で、不安に満ちた将来像の予測から現在の自分に対して一種の強迫観念とも言えるような行動をとり、あるいは家族にも押し付けるというこの社会の問題は、よく考えなければなりません。しかしこれは「終末論」とは関係ないのではないかと、思います。現象的には終末論的な思想が働いているように見えますが、しかしこれは資本主義の論理が強くなった社会において、「優勝劣敗」の原則がきわめて過酷に露骨に出ているためにほかなりません。このような競争社会では、成功が最上の価値となります。それは「頑張った人にはよい報いを」という、どの社会にも通用する原則が強度に浸透しているということでありましょう。これはある意味では「公平」の原理に裏付けられています。つまり「生まれ」や「家柄」で人間が地位や尊敬を得るのではなく、努力とその成果が人のあり方を決めるという仕組みだからです。近代的な社会はこの原則で維持されているからです。これは宗教の言葉では「因果応報」ということになります。

その次の「 . 未来：終末論的課題への挑戦」については、小原先生の分析に大い

に賛成できますので、これ以上は論じることを避けることにします。

最後に、初めの「終末論とは何か」という部分で、イエスに終末論があったかという問題にちょっと触れられています。それは講演の主要テーマではありませんが、わたしの関心を引くところですので、簡単に述べてみたいと思います。イエスと終末論の関係については、19世紀の終わりにヨハネス・ヴァイスが、また20世紀の初めにアルベルト・シュヴァイツァーが取り上げ、それ以来、イエスの語った「神の国」について終末論的な解釈が広まりました。しかしわたしは、イエス自身の思想にどの程度に終末論が認められるか、今日、全面的に再検討しなければならないと思っています。なぜなら、イエスの思想の根本的な部分に終末論は異質だと思われるところがあるからです。たとえばマタイ福音書6章34節の「明日のことまで思い悩むな」というイエスの言葉は、少なくとも未来的な終末時の救いや裁きへの期待とは直接的に結びつかない、と思います。イエスはその言葉と行動において、わたしたちが「今」すでに救われているという喜びを教えたのであって、ある条件の下に（たとえば悔い改めなど）ある未来的な時点で「救われるのであろう」と語ったものではありませんでした。終末論の根底には「因果応報」の思想がありますが、イエスはこれを打ち破って、まさに罪人が救われると教えたのでした。従って20世紀の聖書学は、イエスの思想に終末論を過度に認めすぎたのではないか、と考えています。